発刊にあたって
―東京の〝質〟を支えるのは地方―

富山大学芸術文化学部長
武山 良三
RYOZO TAKEYAMA

じわじわと進行する課題は、切迫感がないため先送りされ続ける。そのため気付いた時には、取り返しのつかない事態になっていることがある。今、地方都市が置かれている状況は、まさにそのようなものだ。都市の活力の源泉となる人口は、少子高齢に伴う自然減に、働き手世代が大都市圏へ流れる社会減が加わり、減少の一途を辿っている。平成28年度の富山県の調査によると15の市町村全てで対前年度増減率がマイナスになっており、中には2・5％余りも減った町がある。人口減は市場規模を縮小させ働き口を減らす。若者は職を求めて大都市に流れ地方都市には空家が増える、という負の連鎖がつくられる。

一方で人口が増加した大都市がバラ色かと言えば、そうとも言えない状況だ。子育て世代は保育所難民となり、介護施設に入所できない高齢者が増加したことで、仕事を休んで介護に当たらなければならない働き手もいる。高い住居費や日々の通勤ラッシュなどの課題を抱えつつも、それを上回る大都市の魅力を享受すべく我慢している。

これまで一貫して経済成長をエンジンとして成立してきた社会のあり方が根本的に揺らいでいる。人口、販売額、事業規模等々が拡大することを前提としてきたこれまでとは逆に、規模が縮小する中でどのように雇用や消費を確保し社会を維持していくかが課題となっている。その活路のひとつと位置づけられるのが〝質〟に対するニーズだ。

昨年4月に銀座六丁目に大型複合施設「ＧＩＮＺＡ ＳＩＸ」がオープンした。低層部の商業施設中央の吹き抜けには草間彌生のオブジェが設置され、取り囲む店舗にはセンス溢れる品物が並べられている。外国人観光客の人気も高く、通路にはさまざまな言語が飛び交っている。彼らの目当ては言うまでもなく日本らしさが感じられる高い〝質〟の商品だ。燕三条の鎚起銅器、金沢の九谷焼、奈良の大和絣、ブランド化に成功した今治タオルなどは、自信を持って薦められる。その一角では高岡が誇る金工製品も肩を並べているが、東京の〝質〟が、地方の事業者や職人によってつくられていることを実感する。地方の衰退は東京の魅力低下に直結する。そのことを深刻に受け止めるべき時だ。高い〝質〟を支える地方を再生することは、地方の人口減少だけでなく、産業振興から保育所の施設不足まで、日本が抱えているさまざまな課題解決に繋がる。

富山大学芸術文化学部では、２００５年の学部創設以来一貫して地域の課題と向き合って来た。多様な専門性を有する教員が揃うことから、これまで別々に取り組まれてきた産業、都市、生活に関する課題を総合的に解決すべく、地域の関係者と連携して取り組んで来た。その成果は２０１２年から『高岡芸術文化都市構想　都萬麻』として、４巻に渡って発刊を行ったが、この度その第二期を開始することとした。出版を通して関係者の連携が一層強くなり、地方創生の狼煙を高々と上げられることを願うばかりだ。最後にもう一度繰り返そう。〝質〟を推進するエンジンは地方にある。

GINZA SIX